

素 材：竹、水、自然石、水中ポンプ 等
大 き さ：h270×w2200×d1200cm
発表場所：105人の時間展（グランシップ前芝生広場）
発 表 年：2009年 8 月
学生との共同制作（参加学生20名）

<作品コンセプト>

水の流れを常に移ろい行く時間に見立て、作品に組み入れた「鹿威し」によりそのエネルギーを音に変換し、来場者に悠久の時間とひと時の涼を体験させる。

<来場者へのメッセージ>

人は太古より、天体の運行による自然の移ろいの中に、時の流れを体感してきました。そして、それを時間という尺度として規格化することで、多くの科学的発展とそれがもたらす利便性を手に入れる一方で、自然から遊離し、その規則性に支配されることになりました。もう一度ゆったり流れる自分だけの時を探す旅に出てはいかがでしょうか。

<作品内容>

グランシップ開館10周年・国民文化祭の開催イベントとして「105人の時間展」が開催された。そこで学生との共同制作作品「記憶の音」を現地制作した。

学生との対話の中で、展覧会の開催期間が夏季であ

ることを考慮し、アート作品としてだけでなくイベント性を高めるための要素として「流し素麺」の案があった。更なるその水の流れを利用し、「鹿威し」の原理を組み入れることが提案された。ただし制作中に竹にカビが発生したため、流し素麺のイベントは実現できなかった。

作品は水中ポンプで水を循環し、左右16個の「鹿威し」に順次水を落としていき、音を発生させようというものである。そして、その中央に歩道を設け鑑賞者が作品の中を移動しながら、体験的に作品を鑑賞できるようになっている。そのスケールは、ゆったりした時の流れを体験できる空間を検討した結果、全長22mにもなった。「鹿威し」の発生する音の不連続性は、悠久の時への思いを誘い、心地よい空間を作り出す。竹を素材とした作品は日本庭園の趣を呈し、背後の磯崎新氏設計による船の形をしたモダンな建築と好対照をなしていた。



